

存在することについて 点より

北山喜夫

幼児期における落書のような絵から学校教育における美術学習を経て石膏デッサン、油絵、彫塑、エッチング、水墨画を学習し、職業で着物に描いていた友禅の絵柄、これに関しては美術の問題としての意識は低かったのですが、色彩の問題に関して結果としては重要な学習になりました。二次元と三次元の表現の在り方と、写実から抽象に至る表現法を学び、そして頂点を過ぎていたモノ派を真似たり、コンセプチュアル・アートを学習しました。つまり多くの人が辿った道で西洋文化の眼差しを持つように西洋美術史を足早に学習したわけです。またこれらのことは、18世紀以降の日本の美術の辿った道と重なるわけです。一つ一つのジャンルにとどまることが出来ず、学習の結果として現代美術に至ったのです。

本当の意味で美術に気が付き興味を持ち始めたのは、現代美術を知ってやり始めたときからです。気が付き興味を持ち始めた時には既に美術は始まっており、模倣とエピソードは破壊されるべき私の世界の壁となっていたのです。それらの学習から新しい表現に至るきっかけになったのは、私の子どもの絵に接したことと、彼らと生活を伴にすることが出来たからです。それはいつも今を生きている感動であり、我々の生の全体像に関わる、まだ踏み込まれていない未来という状況が横たわっているという感動でありました。

彼らの言語生活は彼らの世界の在り方とダイナミックに結びついていることを知りました。物は言葉と別れずに一つのところに居り、物と言葉と私が出会う位置に私を戻してくれました。美術史は既に私を取り囲んで流れておりましたが、私にとっての美術はそこから始まったと言っていいと思います。ヘッケルの生物発生基本原則に「個体発生は系統発生を繰り返す」ということがあります。ひとりの作家の美術史も同じ発生の原則、系統学習を経て個別化に至り始まらざるを得なかったのです。それはながい系統発生の繰り返しの果てに一人の人間が出来上がるのと同じことなのです。

まず私は過去の学習として私の美術を断ち切り、ただの線を描こうとすることから始めました。すべての人間がかつて描いたほとんど落書のような絵です。しかし幼児のような天真爛漫な線はそこにはありません。描いているときに誰かに見られているような気がし、よい線を描こう、線らしい線を描こうという気持ちが自然と働いてしまいます。系統学習を重ねながら私と世界の関係を掴み取ってしまい、私という自己をひたすら作ってきた結果、私と世界は相対化する相手となってしまったのです。私は既に幼児に戻る事が出来ず、大人になってしまっていることをその線から確認しました。

線だけではどうしても作品として成立しません。しかしそこには何かがありました。紛れもないその時の自分でした。そう思ったときに画面に描かれた線を素直に無心に見続けることができました。線はとび跳ねたり彼方の空間には柔らかい線に見えたり強い線をイメージしたりしました。そういった落書のような線を一本ずつ様々な線にイメージし頭のなかで物質の線に見立てました。鉄の線や、木の枝の線、そして竹の線になっていったのです。

線画を下絵として少し離れたその真上にレリーフ上の上絵を施しました。素材となった物は道端に落ちていた物や、既に日常の用を持った身近にあった物でした。下絵は幼兒的な生まれたての無意識的な絵、上絵は大人としての無意識的な絵と言えます。ここにきて初めてこれまで学習という形で学びとってきた系統学習と、私の仕事としてやってきた友禅における色彩等の伝統的な学習が一つになるのです。つまり同一画面上の系統発生的絵画と言えます。そしてその後も作品は系統的に段階的に発展していきます。

四角い画面が角を丸くした四辺形に変わってきます。四角い画面がまだ既成の美術の約束事のように思えたからです。地が上絵に近寄ってきます。そうすると上絵は大きくなり始め壁と床に別れ、別れた上絵は床の上に落ちます。まだ下絵はあります。しかし落ちて上絵は下絵の指し示すものから自由になり、上絵は下絵なしで自立を目指します。もう上絵は下絵を必要とせず、それ自身から始まり、形と色を自由に持ち始めます。画面の拘束を離れた上絵は私の過去という枠から未来へ飛び立ったと言えます。飛び立った上絵は床に降り立ったとき時間の経過とともに徐々に重さを持ち始め、線で囲まれた画面の集積ではなく、木の重さを持った素材として面から始まるのです。壁にとまった上絵は色彩と空間を伴った三次元の立体になっていきます。また、竹や紙の線と面の集合体の量であるため軽量で、量的な存在感は薄れ、反比例して作品を構成している仕事量、つまり時間量が表現の表に現れてくるのです。軽量化は浮遊感を伴い、いつしか天井からワイヤーで吊るされ空中に場所を移していきます。

物理的な条件にとっても壁や床でない空中はもっとも容積の大きな空間と言えます。実態としてはとらえ所のない場所と言えます。勿論壁や床、天井で囲われた空間ではありますがそれは抽象に近いところだとも言えます。作品は囲いから離れ空間そのものの中に迷いこんでいくのです。しかも重力作品は伴う重圧感はなく空間の密度は高くなっていきます。重力からの解放は置かれる場所との関係が薄れ、具体的な場から絵空事とでしか表現しようのない抽象の場へ移行します。その線は絵画と言えます。

大きな画面にポツンと非常に小さな絵を描きました。場所を示す影がないため絵は

画面の膨大な空間の中に浮いています。その時の何枚かの絵のなかに星のような土の塊を描いたものもありました。その塊は点描で描かれ、点の集積が点の面の塊になっていたものです。その時この塊は絵のテーマになり、私の自我形成のテーマでもあったのを発見しました。その塊はいつのまにか同じような三重の丸の塊の絵になりました。そして画面全体が短い線で覆われ余白がなくなった時、絵の世界は画面を覆い尽くそうとする一つの秩序によって閉じられてしまったのです。

閉じられたものは開けなくては新しい世界は始まりません。ですから線香に火をつけ画面全体にばらまき無数の小さな穴を開け、また直接火をつけ大きな穴を作りました。画面全体を何日もかけて白から黒に埋めた作業は鬱屈した時の集積ですが、最後に火で一部無にしていくということはある意味で自己の部分解放と言えます。

絵画のテーマは最初から述べておりますように、自己が世界を獲得する図であります。私が生まれたとき世界はもう既に始まっておりました。それが真っ白な空間の画面だと言えます。画面に私が登場したとき私は画面のなかの点でしかなかったし、点からしか始まらないのです。点の営みは線となり、面となり量塊となっていくでしょう。いつしか画面全体を自我が覆うようになると画面の中で組替えが始まり、整頓され部分部分のものが統一されていきます。ある一個の塊の自己が自己実現された時、その塊の内の外が見えてきて、塊としての自己の場がはっきりしてきます。そしてその場はまだ自己に取り込まれて少しずつ大きな自己になっていくのだと思うのです。その繰り返しが人間の生涯であり、私の生涯でもあります。

まず作品の形態は点から点、点から線、線から面、面から量とそれらばらばらの集合は統一し一塊になります。その塊は膨張します。膨張が頂点に達すると今度は収縮するという一定のフォルム形成のリズムを持ちます。そしてこのリズムは意図したものではなく、必然になされるものであります。このリズムはフォルムが出来る、ある決められた法則のような気がするのです。私の形作ろうとする意図は途中参加したにもかかわらず、もう始まってしまっている世界の動こうとする方向と同じではないかとも思うのです。

カタログ「現代作家シリーズ '93 北山善夫展 Vol.1」(神奈川県立県民ホールギャラリー)より

MEM

NADiff A/P/A/R/T 3F, 1-18-4, Ebisu, Shibuya, Tokyo 150-0013  
Tel.+81(0)3-6459-3205 Mail: art@mem-inc.jp <http://www.mem-inc.jp>